



▲旅先で出会った人たちとホームパーティ

旅に出たい。いろんな世界を見たい。とにかく今の世界から抜け出したい。こんな思いを持つている人は多いだろう。しかし様々な理由により、夢はなかなか叶わないものだ。これから紹介するのは、そんな夢を叶えてしまった青年、米原町の山川敏彦さん(27歳)である。彼は数年前、それまで勤めていた会社を辞め、ヨーロッパなどへの旅に出た。基本的にはあても目的もない旅だ。しばらく諸外国を巡っては日本に戻り、旅の資金を稼いでは再び異国の地へと旅立つ。

日本への連絡は、月に一度のペースで各都市のインターネット・カフェ等から送られてくるEメール。以下は敏彦さんのお兄さんの協力をいただいて、旅道中のほんの一部を紹介したものである。

多少の危険は覚悟のうえ。  
行きたい国へ出かけてしまおう  
冒険野郎  
.....  
山川敏彦さん  
.....  
ただいま  
中南米あたり!?



言葉は現地でマスター

敏彦さんが二度目の長期旅行に出かけたのは、平成十二年四月のこと。今度はメキシコから中南米を南下するのだという。旅先での言葉はどうしているのかというと、日本に

COMME des GARÇONS HOMME  
ISSEY MIYAKE MEN  
OKURA  
GRACE  
bajra  
MADE IN FRANCE  
SILVER'S INC.  
株式会社 シルバース  
1st. PLUS 彦根市中央町7-47 (0749-23-4176)  
定休日のごぞいせん。

特集

地球を歩く人たち

sasahara-moriyuki

fujii-masayuki

umeda-natsuko

tanaka-muneo

yamakawa-toshihiko

観光などで海外へ出かけるのは、ごく普通のことになっているけど、途上国での支援活動となると、尻込みする人も多いはず。ところが、そんな環境にこそ、たまらない魅力を感じ、活躍する人がいる。やりたいことはあるけれど、最初の一步にためらう人が多いなか、自分の夢を追って軽やかに旅立つ人もいる。当人たちは、概して気負いがいいようだ。いったいどんな人なのだろう。あなたの身近なところから、何人かをご紹介しよう。

(現地での写真は、取材させていただいたみなさんからお借りしたものです。)

ishino-miki

kusano-masaharu

nakamaruyuko

yamake-masatoshi

tada-shiroshi



# 年長者を敬う心を教えられた共同生活

## 津田洋志さん

〔米原町番場在住〕

青年海外協力隊で  
タンザニアへ

### 道具を買ったために 渡し船を漕ぐ

タンザニアという国の名前を聞いて、どんなイメージが思い浮かぶでしょうか。アフリカの暑い国、人類最古の足型、サバンナなどでしょうか。日本とはつながりの少ない、遠いアフリカの国ですから、どのあたりにあるのか、ご存知の人も少ないでしょう。タンザニアは、アフリカの最高峰キリマンジャロがある国で、赤道の南に位置し、インド洋に面しています。

そんな遠い国で、青年海外協力隊の一員として、平成八年から三年間、支援活動をしてきた人がいます。米原町番場に住む津田洋志



▲地元の人たちと力を合わせて掘った新しい井戸

さん28歳です。大学の水産学科で海産物の養殖を勉強していた津田さんは、協力隊に参加した経験のある先輩の話聞いたことがきっかけで、自分も見知らぬ国の人たちのために勉強の成果を生かしてみたいと応募しました。

津田さんの活動分野は水産養殖。漁村の人たちに、現金収入の得られる仕事として、水産技術や海藻の養殖を指導するのが目的でした。養殖された海藻は食料になるわけではなく、乾燥して、薬のカプセルに加工されるそうです。津田さんが赴任したのは、タンザニアにあるバンガニという海岸沿いのまち。海藻の養殖の指導は、まずかご作りから始まりました。いろんな種類のかごを作りますが、竹か



ご作りはたいへんだったそうです。日本のように竹がどこにも生えているというわけではなからず。

かご作りだけでもたいへんだったのですから、仕事は順調には進みませんでした。はじめの一年間は、養殖に使うロープなどの道具を買うため、川を渡る人を船に乗せて運ぶ渡し船の仕事をしていました。朝から夕方まで毎日その繰り返しで、いったい自分は何のために来たのだろうか、迷い、悩んだこともあったそうです。

### 寝食とも 家族同様のぬきかた

タンザニアの面積は日本の二倍以上もあり、国土の大半は高原地帯。内陸の高原地帯は、湿度も低く、七、八月の涼しい時期には、毛布を二、三枚かけないと寝られないほどですが、津田さんがいた海岸地方は、まったく逆。



▲明るくのびのびとしたタンザニアの子どもたちと津田さん（中央）

湿度が高く、とても暑い地域だそうです。そんな気候ですから蚊が多く、マラリアに八回も感染しました。高熱が続いたりして、一時はほんとに日本へ帰りたいと思ったそうです。住む場所は、水産訓練所の一戸建てが与えられ、家には困らなかつたのですが、食事は外食、洗濯も井戸で手洗い。井戸の水もあまり衛生的ではなかつたようです。そのために、地元の人たちと力を合わせて、新しく大きな井戸を掘りました。



▲大きくなってきた海藻をカットしている漁村の人たち

### 貧しくても明るく のびのびと生活

タンザニアの言葉は、主にスワヒリ語。出発する前の研修で簡単な言葉を習ったため、最初から会話に不自由はしませんでした。現地の人たちと生活するなかで、夕食をこちそうになつたり、家に泊めてもらったり、子どもたちを泊めたり、といったこともしばしば。家族のようなつき合いができました。家族のように改まらずに挨拶しなくても、今日はこいで晩飯食べるで、というだけで食べさせてくれます。隣の子どもも、寝る場所がないからこいで寝る、と僕の家へ毎晩寝に来てました。おおらかで穏和な津田さんの人柄が異国の人たちとの距離を短くしたのでしょう。

そんなくらしのなかで考えさせられたのは、日本人が忘れてかけていることです。タンザ



▲「カンス」という民族衣装を着た津田さん

ニアの人たちは、年輩の人を尊敬し、とても大切にします。年上の人の指示は必ず守るといいます。子どもがお使いをするのは当たり前。年長者に挨拶をしないと叱られます。また、他人に甘く自分にも甘いということも、彼らの特徴。自分に甘いというのは、悪い意味ではなく、困難なことでも何とかなるさという、のびのびとした考え方を持っているということだと思います。

物質的には決して恵まれていたとは言えないけれど、みんな明るく、のびのびと幸せに生きているのです。

いま、津田さんは医療関係の専門学校に通っています。水産関係とはまったく別の分野ですが、タンザニアで経験したことが、現在の生活にもとても役立っているといいます。それは、何事にも積極的に取り組み、明るく生きようという姿勢。タンザニアでの三年間の経験は、津田さんにとって大切な宝です。

(優花)